

平成 24 年度研究プロジェクト「アジア（特に南シナ海・インド洋）における安全保障秩序」  
分析ペーパー

「世界大国化」を図るインドの戦略

伊藤 融（防衛大学校国際関係学科）

はじめに

冷戦後、とりわけ今世紀に入り、インドの重要性がひろく認識されるようになってきた。わが国を含め、世界の主要国、新興国がインドとの戦略的な関係構築・強化を競っている。インド自身も自らをグローバルな存在として定義する傾向がますます顕著になってきた。

もともとこの国は、元来大国意識の強い国であった。冷戦期のインドは、非同盟運動に代表されるような理念を前面に掲げ、第三世界／途上国のリーダーを自認した。しかしながら、その経済力、軍事力といったハードパワーで見れば、グローバルな舞台ではインドは取るに足らない存在であった。したがってこの点では、インドの現実の影響力は南アジアという地域に長く限定されてきた。しかし 1991 年の経済自由化以降の経済成長と 1998 年の核実験・核保有宣言にみられるような軍事力の増強に伴い、インドの理念と現実との溝が縮まりつつある。

すなわち、21 世紀のインドが目指すのは一口にいえば、「世界大国化」<sup>1</sup>にほかならない。パキスタンという地域の挑戦国との関連で語られる存在から脱し、世界のパワーゲームの文脈のなかで欠かせない存在となることである。はたしてインドはそのためにいかなる外交・安全保障戦略を描いているのであろうか。

1. 戦略好きなインドと戦略なきインド

今日のインドのメディアに目をやると、インド人がいかに戦略好きであるかがよくわかる。さまざまな研究者、ジャーナリスト、元外交官、元軍人が、しばしば「戦略家」として、インドのとるべき戦略を提言している。そもそもインドには、古代から受け継がれてきた戦略文化が存在する。マウリヤ朝を築いた Chandragupta 王に仕えた宰相、カウティリヤの手によるとされる『アルタシャーストラ（実利論）』は、実利＝国益を追求するための冷徹かつプラグマティックな施策が詳細に描かれている。

他方で、現代の「戦略家」たちの多くは、インドには実務のレベルでの戦略、とくに大戦略が欠如していること、あるいはみえにくいことを嘆く。米国のようなグローバルなパワーに対してであれ、近年インド周辺地域にますます影響力を強化しつつある中国に対してであれ、しばしばテロを仕掛けてくるより小さなパキスタンに対してであれ、インドの現実の外交・安全保障政策は、状況対応型の場合当たりのものだという批判はしばしば聞か

---

<sup>1</sup> 堀本武功『変化するインド外交－大国外交を進めるのか』『現代インド・フォーラム』2009 年 4 月（創刊号）、24-31 頁。 <http://www.japan-india.com/pdf/forum/46-1.pdf>

れる。

2012年の初めにインド政府が関与するかたちで民間の研究所から発表された政策提言書、『非同盟 2.0』<sup>2</sup>はそうした批判に応えようとしたひとつの試みであろう。とはいえ、これに対しては、「戦略家」たちの評価は芳しくなく、政府もこの文書をオーソライズすることは避けている。

## 2. 『国防年次報告書』から伺えるインドの安全保障環境と脅威認識

インドの戦略の不在、ないしは曖昧さは安全保障分野に限定してみても変わらない。なるほど、現在、軍事戦略と題する文書を発表しているのは海軍のみであり、統合軍事戦略はまだできていない。したがってここでは、国防省の近年の年次報告書の記述をもとに、インドがいかなる安全保障環境に置かれていると認識し、何を課題とみなしているかを考察するにとどめる。

年次報告書が冒頭ではほぼ毎年強調しているのが、インドの地理的環境である。そこでは、インドは 15,500km を超える長い陸の国境線を有する大陸国家である一方、今日ますます重要性が高まっているインド洋の要に位置する海洋国家という側面もあることが指摘される。独立以来、インドは中国、パキスタンと戦火を交えてきた。それぞれの主因となった国境問題、カシミール問題は未解決であり、この2カ国との陸の国境に警戒しなければならないのは当然ともいえよう。しかし他方で、後述するように、中国の動きに刺激されるような格好で、近年になって海への関心・関与を強調し始めているのである。

近年の年次報告書においてもうひとつ注目すべきなのは、インドがその安全保障を地域のみならず、グローバルな文脈のなかで捉え始めている点である。2008-09年次の報告書からは一貫して、「グローバル安全保障環境」がまず初めに論じられるようになってきている。ここでは、世界のパワーバランスの変化や、テロ・海賊など非対称的脅威の重要性、「アジア太平洋」安定化の必要性などが、そのあとに登場する「地域安全保障環境」とほぼ同分量で記述されている(2011-12年次版)。

「地域安全保障環境」では、パキスタンについて「テロ組織の活動はいまだ衰えをみせておらず、懸念の要因であり続けている」こと、「パ側にあるテロキャンプの存在、越境侵入は依然脅威を突きつけるもの」と論じている。パキスタンの通常戦力や核の脅威については一切言及せず、パキスタンからの越境テロこそがインドのもっぱらの懸念だというのである。これは、いまのインドの本音に近いとみなしてよかろう。

中国についてはどうか。ここでは年次報告書の書きぶりはやや慎重になる。すなわち、「インドは中国との国境問題が未解決であることを安全保障上、計算に入れてはいるが、戦略的・協力的パートナーシップのなかで相互に利益になる領域で協調する努力が払われている」とし、国境問題を抱えつつもパートナーとして協力・関与していくことの意義が強調されている。しかし最後に、「インドは中国が近隣、さらにはその先の地域に軍事的影響力を

---

<sup>2</sup> [http://www.cprindia.org/sites/default/files/NonAlignment%202.0\\_1.pdf](http://www.cprindia.org/sites/default/files/NonAlignment%202.0_1.pdf)

拡大しつつあることを意識し、注意深く観察している」という表現で、「真珠の首飾り」に代表されるような、中国がインドの庭先へ進出を図っていることに強い警戒感を表明しているもいる。

### 3. アメリカの新戦略とインドの戦略関心の拡大

年次報告書など公式文書にはまだみられないものの、最近、メノン国家安全保障補佐官をはじめとして、インドの政府高官がしばしば口にするようになったのが、米国で2010年頃からクリントン国務長官らが使い始めた「インド太平洋」概念である。インドは元来、海についての戦略的関心は、「アデン湾からマラッカ海峡まで」というインド洋に限定されているとみられてきた。しかし中国の海への野心が露わになるにつれ、米国はインドとの海洋協力の強化を望んでいる。インドにも中国が「インドの海」であるはずのインド洋にまで徐々に影響力を行使しはじめなか、米国の動きを歓迎し、利用しようという思惑がないわけではない。2011年、インドはベトナム南沙諸島付近でベトナムと海底油田の共同調査を行ない、中国側の反発を招いた。当面、インドがベトナムとの経済・軍事関係をどこまで構築していくかに注目すれば、インドの関心がマラッカを越えるかがみえてこよう<sup>3</sup>。

しかし、チャコが指摘するように、現在のインド政府の関心は、中国に対する抑止というよりも国内経済の改革に役立つような環境醸成にあるのであって、米国、あるいはオーストラリアなどこの点でかならずしも利害が一致するわけではない<sup>4</sup>。

おわりに

わが国のなかにも、中国に対する牽制としてインドとの関係強化を主張する言説がしばしばみられる。しかしそれをことさらに強調すると、2007年の「日米豪印」構想時にみられたように、インドは消極姿勢を示す。インドにとって、中国は「世界最大の途上国」として、新興国の同志という側面があるからである。気候変動問題やWTOなどで、印中の利害は合致し、グローバル経済秩序を自らに有利なものに変革するため、少なくとも当面は協力しなければならないとの認識が存在する。安全保障面でも、国防年次報告書の慎重な書きぶりからも伺えるように、現時点での中国との軍事的対立は合理的ではなく、回避しようという合意は、インドの安全保障関係者内にひろく共有されている。

---

<sup>3</sup> C.Raja Mohan, "Looking beyond Malacca", *Indian Express*, Oct.11, 2011. <http://www.indianexpress.com/news/looking-beyond-malacca/858300>

<sup>4</sup> Priya Chacko, "India and the Indo-Pacific," Indo-Pacific Governance Research Centre Policy Brief, Nov. 2012. [http://www.adelaide.edu.au/indo-pacific-governance/policy/Chacko\\_PB.pdf](http://www.adelaide.edu.au/indo-pacific-governance/policy/Chacko_PB.pdf)

インドの「世界大国化」に向けた「戦略」らしきものがあるとすれば、この中国に対してみられるような、カウティリヤ以来のプラグマティックな政策なのかもしれない。それは良くいえば、自他のパワーの比較考量とその時々国際環境を睨んだ臨機応変な政策である。しかしそれは悪くいえば無原則な、受け身の政策のように映るのであろう。